

## 安宇植編訳 『アラン岬の旅人たち：聞き書き朝鮮民衆の世界』（書評）

著者	鶴園 裕
雑誌名	歴史評論 = Rekishi hyoron
巻	416
ページ	143-146
発行年	1984-12-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/43875">http://hdl.handle.net/2297/43875</a>

## 安宇植編訳『アリラン峠の旅人たち——聞き書き 朝鮮民衆の世界——』

鶴園 裕

一

本書が世に出て、すでに二年をこす歳月がたっています。この間には何人かの方々の書評があり、また最近の「韓国・朝鮮ブーム」とでもいうべきマスコミ・出版界では、編集部からの依頼をうけた時、何故いままさらこの本の書評をという思いがしなないではありませんでした。また私自身があるいきさつからこの本の仕上げの過程にたちあい、図版や原稿整理などを手伝ったために、書評子としては欠正を欠くのではないかという思いがしたことも事実です。

しかしひるがえって考えてみますと、この種のいわゆる社会的な本は、こと朝鮮史に關していえば日本においては勿論、本国にお

いても必ずしも多いものではありませんし、また私自身、朝鮮の歴史・文化・言語などに雑学的な興味をもつ者の一人として、朝鮮史の立場から昨今の日本における社会史論争に一言のべよということかなどと考えたりもしました。もっとも私が西洋中世史や日本史を舞台としたいいわゆる社会史論争に容喙する能力がある訳でなく、あくまで朝鮮史の立場から何故韓国でこのような本が生みだされるようになったのか、またこの翻訳が日本で出されたことの意味などを考えてみることに、この一文の眼目となるでしょう。

二

どの国のどの民族であれ、ある種の本が出版され、読まれて版を重ねるにはそれなりの

理由があるものです。本書の原著とでもいうべき『プリキップナム』（「根の深い木」の意）という雑誌に連載された「かくれて暮らす一人ぼっち」という聞き書きシリーズは、雑誌そのものは政府によって八〇年夏に廃刊のうき目にあつたにもかかわらず、「伝統社会の黄昏に立つ人々」の副題を付した二冊の単行本となり、現在も版を重ねています。そこでとりあげられた人々は、李朝最後の内侍二宦官に始まり、門付け芸人村、旅芸人、蛇捕り、火田民、妓生、巫堂、パンソリの杖鼓打ち、などなど様々です。原著第二集の編集者のまえがきには、「伝統文化の日陰で五千年を生きてきた人々がいます。今日、その人々は、我々が現代文化とよぶ新しい文化の光にさらされて、我々のそばからすでに消えていったり、消えていこうとしています。（中略）韓国の歴史に一度も堂々と顔を出すことができなかった人々、規範文化のうしろに、賤められ、迫害されて生きなければならなかった人々」とのべられています。つまり大部分は朝鮮社会の底辺を支えてきた人々であるといつてよいでしょう。

『アリラン峠の旅人たち』は、そのうち創刊号から一九七九年二月号までの三年分三六篇の中から、もともと典型的と思われるもの一〇編を選んで収録したとあります。何が典型かということには異論がありませんが、確かに稼負商、白丁とよばれる被差別民、老キーセン、放浪する男だけの芸能集団男寺党、渡り芸人の才人、巫堂、喪興<sup>シウキウ</sup>クンとよばれる棺おけかつぎ、風水師、渡り大工、市巡りの親子鍛冶など、白丁と葬儀屋を除いては『アリラン峠の旅人たち』という表題が象徴するような伝統的な非定住民が主題に選ばれています。原著では必ずしも非定着民や非農業民という限定がなされているわけではなく、ボラとりの漁師やモスムとよばれる作男、牛の仲買人、鋸器職人、カメ作りなど、様々の漁民や農民、職人や商人なども登場します。

しかしここには、現代韓国の典型的なサラリーマンやセマウル運動に組織された農民、低賃金の女工や対照的な高給技術労働者、あるいはサウジアラビアなどで働く建設労働者など、いわゆる韓国社会の「中心部」で仕事をする人々がとりあげられているわけではありません。アメリカの『ワーキング』（邦訳『仕事ノ』晶文社）というような聞き書きは、文字通り普通の様々の労働者たちの労働観や生活観などを聞き書きしたのですが、本書は原著においても「伝統社会の黄昏に」の副題が示すように、歴史的にはすでに過去のものになりつつある「周辺部」の老人達の聞き書きが中心となっています。聞き書き自体も聞き手によってかなりの出来・不出来があり、関心のあり方も老人達の世界観や人生観を問うというような本格的なものから、かなり興味本位のもの、あるいはその職業の歴史性を解明することに主要な関心をそそいでいるものなど様々です。また白丁のように、歴史的にはすでに消滅したものを、隠語や慣習などを研究した言語学者が二〇年近く前のフィールドノートをもとに再構成したものや、訳書には載らなかったものの「最後の内侍」のように、老人自身の聞き書きは申し訳程度で、朝鮮の官官制度の伝承と実態に関する貴重な論文のようなものすらあります。

朝鮮史の中でこのような人々にどれほどの照明があてられてきたのかという点に関していえば、朝鮮本国や日本を問わず、必ずしも肯定的とはいえません。戦前わずかに、李能和の『朝鮮巫俗考』や『朝鮮解語花史』（いずれも一九二七）などがあって、前者は漢文による巫俗の歴史であり、後者はキーセンの歴史を扱うものですが、過去の文献史料を丹念に集めてはいるものの、民衆の内面世界までを描いたものはいえませんでした。

解放後の朝鮮史研究においても、南北両朝鮮において日本帝国主義の植民地支配による植民史観の克服が叫ばれ、方法的には無思想な実証主義の方法が日本の帝国主義支配に奉仕したと敵しい批判をうけ、史観としての民族主義史観や、前近代における停滞論に代わる資本主義萌芽の問題などが提起されてきました。しかしそこでは一種の「近代主義」にわざわざいわれて観念としての民衆像は描かれても、具体的な民衆像は必ずしも説得的にうかんでこないうらみがありました。

近年、韓国の歴史学界ではようやくそのような解放後の「近代主義的」な歴史学界のあり方に対する反省が生まれ、姜万吉氏の『分断時代の歴史認識』（一九七八、邦訳一九八

四、学生社)では解放後の分断時代史学の検討や民族史学論の反省が行われています。また現在性の不在という問題意識から同じ筆者によって『日帝時代の火田民生活』(ソウル『東方学志』一九八一)がとりあげられ、そこでは「植民地支配者たちがその支配体制を維持するためにどのような政策をたてていったのか、被支配民族がそれをうちこわし、解放されるためには、何をしてきたのか」という問題を明らかにしていくことも勿論重要ではあるが、一方、それ以前にはなかった異民族支配のもとで、支配をうけていた大衆が、何を食べ、着、どのように生活をしてきたのかという問題を明らかにすることが、一つの時代の歴史を理解するのにより根本的なものであるとの考えも排除することができない」とのべられています。

前近代史の研究においても、鄭奭鍾氏などは、『朝鮮後期社会変動研究』(一九八三)のまえがき冒頭に「筆者の小さな希望は、歴史の主体は民衆であるという極めて当然の命題が、朝鮮後期(李朝後期のこと)にはどのよう

なことであつた」とのべ、李朝後期の思想史において、儒学の変化にのみ過度の関心をよせ、いわゆる実学思想の内部に近代的な萌芽をのみ見ようとする傾向を鋭く批判し、民衆運動との関連から仏教や道教、民間思想に目をむけなければならぬとの問題提起を行っています。また八〇年代には『韓国社会研究』というような不定期刊行物が発行され、そこでは「トゥレー共同体と農業の社会史」(横井夏、一九八四・二)というような興味深いテーマの論文が書かれたりしています。トゥレーというのは、日本の「ゆい」などに似た農村の田植え時などに行う共同労働です。

『プリキップナム』の「隠れて暮らす一人ぼっち」の民衆聞き書きシリーズは、上述したような専門歴史家たちの仕事とは異なりますが、韓国社会の大きな変動を反映した一つの歴史意識の表現であることには変わりないでしょう。

### 三

『プリキップナム』が創刊された韓国の

七〇年代の後半は、朴政権によってうわべは近代化されたものの、その内容が鋭く問われなければならぬ時代でした。安宇植氏がこの雑誌の創刊の辞を引用しながら、『アリラ ン峠の旅人たち』のあとがきで、「創刊の辞に、『土着の文化が、歴史によって疎んじられてきた隠れた価値を発揮し、我々の肌合わぬ高級文化の陰にあって萎れず、こんにち吹き荒れる大衆文化によっても引き裂かれず、変化がもたらす進歩との調和の取れた出会いがなされる時、わが文化はより瑞々しく育つものと思ます』とあることはそれを裏がきしている。またそうなった時、土着の文化は土着のままに終わらず、世界文化の一端につらなるというのである。このような雑誌の意図をもっともよく反映している一つが、聞き書きシリーズ『隠れて暮らす独りぼっち』であつた」と適切に評価しているように、『プリキップナム』の創刊は、自民族の文化に対する反省的な自己の主体性の発見を意図したものだといつてよいと思います。

しかしながらこのような聞き書きという行為には、一種の二律背反性が伴うようです。お

おむね聞き手はソウルを中心とした記者や小説家、詩人などで、当事者達の世界に同情や共感を示し得ても、しばしば当事者達から拒絶反応を示される人々であり、「近代」の側に立つ人々であって「伝統社会のたそがれ」の側に立った人々の世界に入りこめないでいる場面は、しばしば見うけられました（翻訳されたものの中では老キーセンや風水師などの聞き書き）。聞か者と聞かれる側に共感があつてこそこれらの聞き書きは成功するのでしようが、編集者自身にも一種のためらいがあつたのでしようか、単行本のうら扉には、「し

かしどうかすると、我々は彼等の『汚れた運命』を見、日没の空をみるように惜しむべき美しさを感じるしかない局外者なのかも知れません。」などと気弱な感傷をもらしています。とはいえ、多くの聞き書きは、聞き手に専門的な歴史学者などはいないにもかかわらず、総じて対象となる人々の歴史や風俗などはよく調べられており、様々の庶民の生き様が目に浮かぶように描かれています。またそれらの姿を通して、採負商の仁義や倫理感、白丁にみる聖なるものと差別、政界と姦生、

渡り芸人や渡り大工と男色など、日本史や或いは人類史的な普遍性をもった民衆世界のありように驚かされるかも知れません。

朝鮮文学者の長璋吉氏はこの本を評して「われわれは歴史のうわずみばかりすすってきたことは知っていた。だからその底によこんでいるものを欲してきた。（中略）歴史書の断片や写真、テレビ、舞台を通してしか知らなかったかれらが、いまわれわれに語りかけてくる。韓国に暮らしたことがある人なら、通りがかりに路端に見過したかれらのしごと、かれらの芸、かれらのつくる日用の道具、生産物が、かれらの生活の泥土にまみれて目のまえにひろがってくるのを感じるだろう」（『朝鮮研究』二二三）とのべています。が、同感です。しかし私たちの感想がそれのみにとどまるならば、やはり伝統社会のたそがれにたつて夕焼け空が美しいと感傷にひたつたり、あるいは新車の韓国通のための観光ガイドをみるにすぎないかも知れません。日本で翻訳されたことの意義は、やはり朝鮮の底辺民衆の貧しくとも根元的な生き方を通して、我々自身の一見豊かな、しかし貧しい生

き方を反省させる所にあるのではないでしようか。確かにこれらの民衆の世界には、我々が進歩という名によって、しゃにむにつづばしってきた近代化という道のりの中でみすてきたものが数多くあります。韓国でも恐らくはそのような歴史の反省点に立ちつつあるのでしよう。とはいえ、反近代という名での歴史の逆もどりは不可能である以上、歴史学という固有の自己省察的な方法を用いて現代をきり開く以外に方法はないでしよう。その時、社会史は決して単なる身辺雑記や一種の歴史観光ガイドに墮することはありえないのではないかとのおさやかな感想を付して、この濃密な聞き書き集の書評にかえようと思います。（一九八四年八月記）

（一九八二年刊、平凡社、一八〇〇円）

\* \* \*